

主題	看取り介護におけるスピリチュアルケアの取り組み効果と課題について		
副題	スピリチュアルケアに取り組む事で利用者・家族・職員の想いを形にする		
看取り介護		スピリチュアルケア (spiritual care)	
研究期間	15ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム 江戸川光照苑
発表者：志賀 翔太（しが しょうた）		アドバイザー：柴田 一佐哲（しばた ひさあき）	
共同研究者：赤岸あや子・関根悟・平島卓・桑原幸一・澤田祐太・福島芳明・阿部正人			
電 話	03-5668-0051	メール	hikaru@e-kousyoen.or.jp
FAX	03-5668-0052	URL	http://www.e-kousyoen.or.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	当苑は平成8年7月に江戸川区では、6番目の特別養護老人ホーム・高齢者在宅サービスセンターとして開設しました。江戸川区の北部、京成小岩駅の程近くに位置し、下町の人情溢れる温かさをそのままに、家庭的で心温まる介護サービスを提供しています。また平成21年6月江戸川区では初となるISO9001の認証を取得し、さらに国内の社会福祉法人では初となるISO27001/ISMS（情報セキュリティマネジメント）を取得し、安全で高品質な介護サービスを目指し取り組んでいます。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

看取りについて「看取りマニュアル」「ターミナルケアにおける精神ケアマニュアル」があるが、実際の支援ではマニュアル・計画書通りに対応すればよいという作業的なものになっていた。

看取り後の振り返りが不十分で、次回へ繋げられずにおり、職員は「死」に対して恐怖感により、終末期の利用者又は家族とどのように接し、想いを受け止めてよいか悩んでいた。

このために利用者の思いを推し量る具体的な取り組みとして、外部研修に参加し「スピリチュアルケア」が利用者や家族の思いに寄り添い、職員の教育、ケア、想いの平準化などに効果があると言われていた。

その様な状況の中、自らの威厳を持たれ、職員にも苦痛を訴えずに相手を労う姿を見せ、最期を迎えた一人の利用者がいた。その利用者の姿勢を見て、介護のプロ・専門職として、スピリチュアルケアに取り組む事で最期を迎える利用者の人生に寄り添い、看取り介護の平準化が図れ、ケアの質の向上が図れるのではと考えた。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

スピリチュアルケアとは「霊的（スピリチュアル）苦痛とは霊（魂、心）が求める欲求（ニーズ）が満たされない時に痛みが発生し、その痛みが「叫び」によって表現される。その叫びに対応する（ケアする）のが霊的ケア（スピリチュアルケア）である。終末期においてケア提供者はトータールペイン（全人的苦痛）の視点から苦痛を和らげ

るケアが求められ、身体的苦痛・精神的苦痛・社会的苦痛の他にスピリチュアルペイン（霊的な痛み）という「人生の意味」、「死の恐怖」、「罪の意識」があり、そこにアプローチするケアとして主に牧師が担ってきた。

介護現場でも宗教的ニーズを含まなくても、スピリチュアルケアを実践でき、かつ形骸化していた看取り介護の質の向上が図れるのではと考え、次の効果を期待し取り組んだ。

《期待する効果》

- ①主に宗教的な場で牧師が行うとされるスピリチュアルケアを介護現場の看取り介護に用いることで、なぜ死ななければならないのかなどという「死への恐怖」「孤独感」や、家族がいなくなることへの悲しみや不安を表す、「家族、家族への罪悪感」など、利用者・家族の想いに寄り添い、スピリチュアルペイン（霊的な痛み）を利用者だけでなく、家族・職員も含めて目的意識をもって気持ち、想いを形にすることができるのではないかと。
- ②スピリチュアルケアを通して死への恐怖が受け入れられることによって、看取り介護において作業的だった看取り介護が平準化され職員の資質が向上するのではないかと。

《3. 具体的な取り組みの内容》

(1)、スピリチュアルケアマニュアルの作成

ケア向上検討小委員会が中心となり、外部研修・書籍等から情報収集し委員会内で勉強会を実

施。「高齢者福祉施設におけるスピリチュアルケアとは」との視点から、看取り介護への想いの方向性を示すためと教育のためのマニュアルとして、スピリチュアルケアの概要、当苑の看取り事例、想いのかたち評価表（デスクンファレンス評価表）で構成し当苑独自のマニュアルを作成。

(2)、マニュアル作成の中での看取り事例

①〇氏 91 歳 男性
②看取り期間：平成 24 年 8 月 18 日～9 月 9 日

③状態：食事水分確保出来ず衰弱状態となり看取り開始となる

④スピリチュアルペインの抽出

「自らの死への恐怖」「孤独感」

「家族、家族への罪悪感」

⑤抽出されたペイン（痛み）への具体的なケア

「自らの死への恐怖」「孤独感」に対して

- 利用者の好きな昭和の歌や家族・利用者が一番思い出深い出来事を手を添えて語りかけ
- 息を引き取る数時間前から家族、職員が交互に手を握り付き添い、息を引き取る瞬間に立ち会い、エンゼルケアを家族と実施

「家族、家族への罪悪感」に対して

- 家族と協力して居室に逢わせたい曾孫さんの写真を飾った
- 別フロアに入居されている奥様と一緒に過ごす機会を多くもち、手を握り合ったりスキンシップを図った

家族のペインを引き出すアプローチとして

- 家族と利用者の日々の状態や思い出深い出来事を話し合っていく中で、「ここで看取ってもらえてよかった」と感じ、家族の死を受け入れ、気持ちの整理をしていた。

(3)、終末期における意識調査アンケート実施

アンケート期間は平成 25 年 6 月 13～6 月 20 日、対象は介護職員、看護職員、相談員、ケアマネジャー、副苑長。調査方法は質問紙法で回収は記名式でケア向上検討小委員会が当たった。

《4. 取り組みの結果と考察》

(1)、事例からスピリチュアルケアの結果と考察

利用者：感じているであろうスピリチュアルペインが家族と職員とが行う具体的なスピリチュアルケアにより、家族への後悔や死への恐怖、孤独感が和らぎ、静かに穏やかに永眠された。

家族：スピリチュアルペインに対してのケアを提案していく中で「曾孫に会わせてあげたい」「好きな音楽を聞かせてあげたい」と家族の希望が聞け、一緒に写真飾りや音楽提供をし「父も嬉しいんだろうな」と感じたことを後に話され、家族の死への恐怖が和らいだ。

職員：看取り介護で感じている受け入れ難い死への恐怖、弱っていく利用者への悲しみ、介護業務の中での不安が、利用者の想いを汲み取り、その想いに対して何が出来るかを職員間で話し合い、全職員の協力で具体的なケア＜3－(2)＞を行い、家族の理解・協力を得たことで、利用者の死というものに寄り添い受け入れることができた。

(2)、終末期における意識調査アンケート結果

- ①属性 回収率 78% 有効回答 21 名
②質問内容に対する結果と評価

スピリチュアルケア導入後、全ての職員が看取り介護の質が向上したと感じ、7 割の職員が自主的な提案・取り組みが増えたと感じる結果となった。死への恐怖や不安が大きな部分を占めていたが、スピリチュアルケアによって、家族への支援やどうしたら孤独感が無くせるか、家族と一緒に看取ろうという想いによって、家族との対話の機会が増え、利用者との思い出深い話が聞け、ペインの緩和に役立った。

以前は看取りを行っているフロアの職員しか関わりがなかったが、現在は他フロアの職員も訪室し手を添えて語りかけの機会が増え、少ない職員の中、全職員が関わることは利用者・家族にとって孤独感の解消に効果があった。介護として出来る看取り介護が進められた。スピリチュアルペインの緩和という具体的な目的意識を持つことにより専門的な関わりを持つことができた。

《5. まとめ、結論》

スピリチュアルケアの一端を導入したことでどんな利用者でも「死への恐怖」「孤独感」を感じており、利用者だけでなく、利用者に関わる「家族」「職員」も同様の「痛み・苦しみ」を感じている事を再認識した。また「魂の痛み」であるスピリチュアルペインを和らげるツールとして活用できれば利用者、家族の思いに寄り添い、かつ職員の資質の向上や想いの深さに触れることもできたと考える。スピリチュアルケアが導入される以前の看取り介護と比べ、職員自身が利用者の死そのものを自然と受け入れられるようになり、スピリチュアルペインを和らげる目的を持つことで介護現場でもスピリチュアルケアが有効であることが取り組んだ成果である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

職員アンケートと看取り事例については、それぞれ職員、ご家族に研究以外では使用しないこととし、不利益を被る事がない事を書面及び口頭で説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・朝田俊彦（2003）『笑って死ぬために～スピリチュアルケアとは～』メディカ出版
- ・「臨床パストラル教育研究センター」
<<http://pastoralcare.jp>>（2012/8/20 アクセス）

《8. 提案と発信》

「終の棲家」と呼ばれる介護老人福祉施設として看取り介護は必須である。スピリチュアルケアは看取り介護のひとつのケアでしかないかもしれないが、さまざまな苦痛のみでなく、利用者個々の「魂の痛み」を和らげることができればここに提案と発信をするものである。

【メモ欄】